いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

サークルO.L.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

【Ｎコード】
Ｎ６２５６Ｚ

【作者名】
サークルＯ．Ｌ．

【あらすじ】
タイトルが本編で、内容は詩である。

君を好きになったのはいつなのか？（前書き）

タイトルが本題で、お送りするのは尖角です。

君を好きになったのはいつなのか？

悲しいかな、今日も俺は独りに耐えて生きている。

苦しいかな、友達も彼女もいないただ一人の孤独の生活は。

嬉しいかな、誰にも知らずに死ねるたった一つの喜びは。

俺は涙を流さない。

涙というものはとっくの昔に枯れてしまったのだから。

大好きなんて言葉にはとっくに飽きてしまったのだ。

伝えることができない、たった一人の俺にのしかかる重圧。

そこにあるのは空虚な生活。

悲しみも、怒りも、喜びも、楽しみも、愛も、何も、そこにはない。

俺が君から奪った幸せは、俺から君というものを奪った。

それは、昨日の話だったのか？

それとも、数年前の過去の話なのか？

それとも、俺が生まれるずっと前の話だったのか？

俺はたった一人の孤独な悪魔。

俺に涙なんてものはいらない。

その涙を映すものは無く、誰も拭ってなどくれないのだから。

自分で拭うことなんてできないよ。

「君を抱きたい」というために腕を切り落としたから。

君に近づくことなんてできないよ。

その欲望を鎮めるために足を切り落としたのだから。

君の鼓動を知ることはできないよ。

君にしたように、僕の胸にも穴をあけたのだから。

大好きだったんだ。　この世の中で最も。

だけど、俺は罪深き罪人。

君に愛の生き死にを教えることなどできないのだ。

所詮、俺は生けとし死せるもの。

何もそこにはありはしない。

ただ、そこにあるのはたった一人の虚しき存在。

俺はふと、記憶の奥底を探ってみる。

夢か現か、幻か？

涙の意味は何なのか？

苦しいとは何なのか？

君というものは何なのか？

嬉しさは所々で俺に話しかける。

「君は今、幸せですか？」

「いいや、別に？」　俺は答える。

寂しさは俺に話を振ろうとする。

「君は一人でもいいのかい？」

「ああ、寂しくはないよ、、、」

悲しさは俺に言葉を投げかける。

「君は一体、何がしたい？」

「それは、ただただ死にたいだけだ・・・」

君は俺に言うのである。

「あなたは良い人――――」

じゃあ、なぜこんなことになるのか？

俺には意味が分からない。

愛が愛で無くなった時、それは一体何になると思う？

それはゾンビさ、　寂しさゆえの一人の人生。

そうだ、　俺は無意味に生きるだけ。

だけど、俺の記憶にそれは残っていない。

あたしは、気付いていたのかもしれない。

あなたが、別れを用意するより先に、あたし達の関係が終わりに近づいていたことに。

あなたの傍にいたのに、あなたは変わらないのに、あたしは変わってしまうもどかしさ。

寂しさがとめどなく溢れ出して、あたしは過去を振り返って見る。

いくらでも戻れるチャンスはあったはずなのに、あたしはそれに見向きもしないで突き進んだ。

だから、あたし達の関係は終わりを向けえるんだ、、、きっと。

ありがとう、　ただそれだけは言わせてよ。

ちょっとだけの恋人関係だったけど、楽しかったよ。

じゃあ、一体どこにあるのだろうか？

気持ちを静めてあなたの前に立ってみる。

すると、どうなると思う？

さっきまではトクトク流れていた私の血も、

いつの間にかドックンドックンに変わっているのである。

それはまるで映画の音響みたく大きな音で、

３Ｄのように私から突き出てきそうで――――。

あなたのことが好きなんだ。

この血よりも真っ赤な愛が、それを証明しようとしている。

だから、一歩だけでも君の下に近づいてみるよ。

それが、私にとっての精一杯の努力なんだから。

俺はそう思い、君の瞳を見つめてみる。

あなたに会いたい――――。

それ以外の気持ちが、必要なのだろうか？

私にはあなたしかいない。

だから、私はあなたを求めるんだ。

あなたが、例え私を好きでなくても、

私が愛せるのならばそれで構わない。

あなたの意見なんて聞いてないんだよ？

あぁ、血だらけの人形たちよ！

私のために、お歌を唄いなさい。

あぁ、血だらけのあなたたちよ！

私のために、骨と血肉になるのです。

あぁ、素晴らしき子供たちよ！

私のために、死して無くなれ何もかも。

だが、そこに映りこむのは空っぽになった俺の姿。

口だけの想いならば、俺はそれなりに言えるであろう。

ただ、愛や恋だけでは語れないのが、君と僕との関係。

でも、俺は思うんだ。

約束を守れない俺、　そして離れ離れになってしまった二人の距離。

愛しても、愛しても、　なかなかその想いは届かない。

ならば、君を愛す理由なんて何もないんだ・・・。

だったら、俺は何をしても自由だろう？

君を振ったって、　例え死んだって、、、

逢いたくて、逢いたくても、　叶わないならば、俺はこの愛しさを

抱いて眠るよ。

俺は力を失っていたんだ――――――。

君を知れば知るほど、俺は俺自身を見失っていく。

心は涙に溺れて、俺は記憶に埋もれていく。

叫びはない。　そこにあるのは発狂という言葉だけ。

＞こっちにおいでよ、　キモチヨクナレルカラ。

＞こっちにおいでよ、　ダキシメテアゲルカラ。

君からそんな言葉が聞こえてくるようで、君の口元の動きを俺は直視できない。

＞こっちにこいよ、　クッテアゲヨウカ？

＞こっちにこいよ、　ヤイテシマオウカ？

俺はお返しに、その言葉を君に捧げる――――――。

そう思った時には、すでに手遅れだった。

生と死の狭間、

過去と現在の記憶、

無意味と混沌の悲しみ、

俺は君を絶対に許さない。

例え、人生が歪んだとしたって、

例え、性格が捻じ曲がっていると言われたって、

俺は絶対に君を赦しはしない。

死ねばいいのに――。

俺は、その言葉を君に捧ぐよ。

愛していた？

この俺様が？

君みたいな女を？

ビッチなんだよ？君は。

ヤレれば誰だって構わない君だよ？

俺が好きになる訳がないだろう？

屈辱だよ。

例え、君を一瞬でも愛したという事実があるのは。

最悪だよ。

君に指輪をあげてしまったことが――――――。

君が好きだったけれど、想いすぎていた。

人生で少しだけ後悔したことがある。

それは君に別れを告げてしまったこと。

大好きだったけれど、なんだか気持ちはすれ違って、うまくいかない。

そんな日の繰り返しに俺は疲れてしまったから、君に別れを告げた。

それからも、時々君のことを考えていた。

あの時・・・この時・・・そして今・・・

何をしてやればよかったのか？

それでも俺達の関係はダメだったのか？

苦しかった日々は免れたのか？乗り越えることができたのか？

俺は君と別れたことで何か手に入れることができたのか？

多分、手に入れたのは“後悔”――――それだけだろう。

何事も、“やりすぎ”はよくない。

――全てのことはうまくはいかない。

そんなことはわかっていたよ。

だけど、君とのことの全部がダメだなんて思ってなんかいなかった。

俺は、考えたこともなかった。

君と出会って、喧嘩をして、それでいて苦しくって、ふと気が付けば別れていて・・・

そして、君は死んでしまった、いなくなってしまった・・・俺の前から・・・

何だ、人生ってそんなものなのか？

命ってそんなに簡単に失われるものなのか？

俺はわからないから、少しだけ神様に刃向ってみるよ。

それは、誰もが知っている“当たり前の事”。

歌を唄い、言葉を葬る。

そこにあるのは、人間(ひと)の叫び。

我らは行う、悪魔の降臨儀式(よびだし)。

ここは正も誤も存在しない、偽りの世界。

本当なんてものは、ここにはありはしない。

君も俺も、そして全てが嘘偽りでできている。

さぁ、血に染まるがいい。　どこまでも真紅に。

真っ赤に飢えた獣どもが、お前の血を求めて蠢(うご)いているぞ？

さぁ、啜れ。　好きなだけ生き血を啜るがいい。

真っ赤に飢えた獣どもが、お前の魂を求めて扉を叩く。

だけど、俺はそんな当たり前に気付きもせず、俺はお前を愛し続けた。

俺はお前が憎い。

楽しかった人生を、つまらない人生に変えたお前が憎い。

お前に出逢うまでは、「あの子がかわいい」とか「あの子とヤりたい」とか思えたのに、今はお前しか考えることができない。

憎くて、だけど愛してるから、、、

お前を憎むことはできても、殺すことはできない。

せめて、出逢った人がお前じゃなかったのなら、俺は変われたのかな？

俺は違った人生を歩めていたのかな？

ありがとな、　お前を憎んでいても、俺は幸せだったよ。

ありがとな、　死んでも、お前だけは忘れないからな・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6256z/

いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

2011年12月26日21時45分発行